

最近図書館に入った本の中から何冊か紹介します。本の後にある【019 / T2 / 1】などという記号は図書館での請求番号です。

佐村河内守「交響曲第一番」(講談社)【762 / S24 / 1】

著者の名前の読み方は、さむらごうち・まもる。作曲家。1963年、被爆2世として広島に生まれる。4歳になった日から6年間、母からピアノの特訓を受けた。幼少より尺八・ヴァイオリン・マリンバなども習うが、作曲に関して専門的な教育は受けたことがなく、すべて独学で身につけた。

高校時代からすさまじい偏頭痛に悩まされ、20代で聴覚異常を発症、35歳のとき、一切の聴力を失って全聾となる。全聾後に作曲したゲームソフト「鬼武者」の音楽が世界的に高く評価されたが、全聾ゆえに「隠遁生活」を選ぶ。抑鬱神経症・不安神経症(パニック障害)といった重度の神経障害に加え、頭鳴症や耳鳴り発作など、止むことのない肉体的・精神的苦痛の中で絶対音感を頼りに作曲を続け、現代のベートーヴェンと呼ばれたりする。本書はその壮絶な生涯を記録した自伝である。

2003年秋に完成した最初の交響曲『交響曲第一番』(74分)はプロのオーケストラによってすぐにとりあげられ、2011年に発売されたCDはクラシック作品としては異例の売り上げを記録した(大友直人指揮・東京交響楽団)。

佐村河内守の創作意欲は旺盛で、その後、『交響曲第二番』(110分)を発表し、現在『交響曲第三番』を作曲中だという。他に弦楽四重奏曲やピアノのための曲や合唱曲も書いている。

ブリギッテ・シテーガ「世界が認めたニッポンの居眠り」

(阪急コミュニケーションズ)【498 / S22 / 1】

多くのドイツ人やオーストリア人にとって、職場の会議中や学校の授業中に眠るということは考えられないことだそう。ドイツ語で書かれたこの本で「イネムリ」は「サムライ」や「ツナミ」ほどではないが、ドイツ語圏でかなり普及したという。本書は日本における居眠りという習慣、自然の行為に関して、外国人の視点から見た興味深い本である。

睡眠に関するさまざまなデータから、筆者は睡眠には基本的に3つのパターン(文化圏)が存在するという。第1のタイプは単相睡眠、1日の睡眠が1回だけ、それも夜間という文化圏。第2のタイプはシエスタ文化圏。夜間の睡眠時間が短く、昼寝が社会的に制度化されている文化圏である。第3のタイプが仮眠文化圏で、夜間の睡眠時間が短く、各個人が気ままにうたた寝・居眠りす

る文化圏であり、日本はこの文化圏に入る。

筆者は以上の3タイプに優劣はないと言い、本書には居眠りのさまざまな効用が記されている。人生の3分の1が費やされる睡眠というものについて考えるための非常に有益な本である。

筆者はウィーン生まれ。ウィーン大学日本学研究所で睡眠に関する研究で博士号を取得した。現在はケンブリッジ大学で日本の日常生活を研究している。近年は東日本大震災で被災した岩手県山田町の人々とともに暮らし、聞き取り調査も行っている。

マルセル・ブルースト(吉川一義訳)「失われた時を求めて」(岩波文庫)
【081/I1-8N/511-1~14】

ジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』と並んで、20世紀に書かれた小説の最高峰として知られるが、長大で、最後まで読み通すのが困難なことでも有名で、『源氏物語』とよく比較される。『源氏物語』は全54帖からなるが、12番目の「須磨」の巻あたりでギブアップする人が少なくなく、「須磨返り」という言葉があるほどである。『失われた時を求めて』についても同様の言葉がある。

『失われた時を求めて』の日本語へ個人全訳はこれまでに井上究一郎訳(筑摩書房版)と鈴木道彦訳(集英社版)があり、この吉川訳は3つ目になる。全14冊で半年に1冊ずつの間隔で出るので、出るたびに読んでいくと全巻の読破が可能になりそうである。現在6冊目まで出ている。予定通りに刊行されても全巻完結するのは4年後になる。

この翻訳は訳文がわかりやすく、註と図版も大量に付いているのが特色である。これまで、『失われた時を求めて』全巻読破をめざして挫折した人は、この訳で再挑戦してみてはいかがか。

毎日新聞「境界を生きる」取材班「境界を生きるー性と生のはざままで」
(毎日新聞社)【367/M16/1】

本書では性分化疾患(Disorder of Sex Development)や性同一性障害(Gender Identity Disorder)で苦しむ人々の多様かつ具体的な状況が数多く取り上げられている。

性分化疾患(DSD)とは、通常は男女どちらかで統一される性器や性腺、染色体の性別が曖昧だったり、一致しなかったりする疾患の総称で、70種類以上あり、2000人から4500人に1人の割合で生まれるとされる。性同一性障害(GID)は、身体的な性別と心理的な性別が一致せず、体に強い違和感を覚えて悩む状態で、国内に少なくとも1万人以上いると推計される。

本書は、2009年9月から毎日新聞に連載された「境界を生きる」をもとに加筆・修正・再構成されたものである。

「永久保存版 織田作之助一昭和を駆け抜けた伝説の文士"オダサク"」
(河出書房新社)【910/040/1】

織田作之助は1913年に大阪市南区生玉前町(現・天王寺区)に生まれ、1947年に34歳で没した。文学史的には太宰治や檀一雄とともに「無頼派」に分類されるが、実際にその作品を読んでみると、こういうレッテルはあまり当てはまらない気がする。織田の作品の多くは大阪を舞台とし、大阪の庶民を描いている。読んでみるとなつかしいような切ないような気持ちにさせられるものが多い。オダサクと略されて呼ばれるのも親しみやすさと人気の高さを物語っている。

今年は生誕100年にあたるということで織田作之助関係の本の出版が相次いでいる。代表作である『夫婦善哉』の自筆原稿本が出版され、岩波文庫では3冊の作品集が次々と出版された(作品の中には、2007年に発見された『続夫婦善哉』も含まれている)。

本書は多くの貴重な証言と写真からなり、作品からだけでは知ることのできない織田作之助の素顔に触れることができる。

彼の作品のうち『夫婦善哉』(1955年・豊田四郎監督・森繁久彌・淡島千景主演)と『わが町』(1956年・川島雄三監督・辰巳柳太郎主演)が映画化されている。『夫婦善哉』は日本映画のベストテンに入るような傑作である。

[作]ジョアン・スファール・[訳]池澤夏樹・[原作]アントワーヌ・ド・サン・テグジュペリ 『星の王子さま』(サンクチュアリ出版)

この本は近日、図書館に入る予定です。

サン・テグジュペリの『星の王子さま』の訳はすでにたくさんあって、本校図書館にも5種類の翻訳が入っているが、今回紹介する『星の王子さま』は翻訳ではなく、コミック版である。作者のジョアン・スファールは1971年フランスのニーズ生まれ。大学で哲学を専攻し、パリ国立美術学校で美術を学ぶ。卒業後BD(バンド・デシネ)作家として活躍。『Le Chat du rabbin』は25カ国語に翻訳され85万部を売り上げるといって成功を収めた。

サン・テグジュペリの『星の王子さま』には、作者自身によるすばらしい挿絵が付いていて、世界中で親しまれ、愛されている。それをコミックにするとどうなるか。

原作では高貴な雰囲気を持つ王子さまが、コミック版では元気な男の子になっている。語り手である作者サン・テグジュペリも(スファールによって)客観的に見られ、時にはからかわれている。原作にないキャラクターなども登場する。

しかし、このコミックを読み終えてみて感じたのは、原作の精神は少しもそこなわれていない。むしろ、原作の豊かさをあらためて味わうことができたという思いがした。

この本の帯には、「原作者の遺族がただひとつ認めたフランスコミック」とある。

B D (バンド・デシネ) ...日本のマンガに比べるとカラーの大判で、^{こま} 罫のサイズは一定していて、絵が凝っていて、その代わりアクションなどはマンガほど派手ではない。ぜんたいとして大人向き

近代日本文学作品の復刻本を読んでもみませんか？

今回紹介するのは、「名著復刻全集」(日本近代文学館刊)である。本文の文字だけでなく、装丁・挿絵・紙の質などにいたるまで、できるだけ初版本を再現したものである。初版本そのもののような希少価値はないが、初版本とほぼ同じ雰囲気を楽しむことができる。図書館の閲覧室に入って右奥、ガラスケースに収められて、大切に保管されている。国語科の先生がたまに借りるくらいで、生徒が利用することはほとんどない。

お薦めの本何冊かを挙げてみよう。

三好達治の詩集『測量船』。

1930年(昭和5年)に発行された、この詩人の最初の詩集である。清新な詩世界が1冊の詩集の中に凝縮されている。1冊の詩集をまるごと読む醍醐味が味わえる。一部に革を用いたハードカバーの装丁も手にしやすく、美しい。

樋口一葉『たけくらべ』。

本文は樋口一葉の毛筆の手書きの美しい原稿をそのまま印刷して載せている。原稿の文字を一部塗りつぶして訂正した箇所も見られる。この本で全編を読み通すのは難しいが、樋口一葉の生きた時代に近づくことができる。

夏目漱石『吾輩は猫である』

大判で、上・中・下の三編からなる。天金が施されている豪華本である。猫の挿絵が楽しい。『吾輩は猫である』は普通の小説と違って、はっきりしたストーリーもなく、読み通すのは案外難しい作品だが、この復刻本は字も大きく、余白もたっぷりあってあり、所々拾い読みする感じで読むのにちょうどよい。フランス綴じなのでペーパーナイフが必要。

萩原朔太郎『月に吠える』

朔太郎のやや病的で特異な詩世界に浸ることができる。田中恭吉と恩地孝四郎の挿絵が詩と一体になって迫ってくる。これもフランス綴じ。

芥川龍之介『羅生門』

『羅生門』を含む14編の短編が収録されている。『羅生門』の最後の1文は「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いでゐた。」となっている。

